

## 京都文教大学人間学研究所 共同プロジェクト 「個人の思想形成と蔵書の研究」研究会報告

日時：2007年12月21日

於：京都文教大学人間学研究所所長室

### 鶴見和子とエリクソン

高石 浩一

さる2007年12月21日、人間学研究所「個人の思想形成と蔵書の研究」研究班の報告会が行われ、研究班代表の一人である高石浩一が、これまでの成果を報告した。本学にはエリクソンの著書のいくつかが鶴見文庫として保管され、鶴見和子氏自身の肉筆による朱線や書き込みがなされている。今回の発表では、同時代的に活躍したエリクソンが鶴見氏の思想形成にどのような影響を及ぼしたかについて、こうした資料をもとに跡づけようという試みが報告されたが、現時点では、論文としてまとまった形で研究成果を報告するに至っていないので、さしあたり中間報告として発表の概要とこれまでの経緯について以下に述べたい。

#### 1. はじめに—二人の生きた時代と背景—

そもそもエリクソン(1902-1994)は、ユダヤ系デンマーク人の母が産んだ私生児であり、彼女が息子の主治医である小児科医と再婚して、養父エリックの息子と言う意味のエリクソンを名乗るようになったという経緯がある。プロテスタントが多数の地域でユダヤ人学校に通った彼は、父母の出自の文化的背景の違いも含めて、自ら自我同一性の拡散と混乱を体験するよう運命づけられていたと言っても過言ではない。また、後になって戦争の激化に伴い、母の母国デンマークの国籍を取り損ねた彼は、妻の祖国であるアメリカにその活躍の足場を求めるしかなかったという事実も、

彼のアイデンティティという概念形成に一役買っていると思われる。

一方鶴見和子(1918-2006)は、エリクソンとほぼ同時期の1936年に初めて渡米し(エリクソンは1933年)、以降もっぱらアメリカの大学で研究活動を行っていた。おりしも第二次大戦から学生運動で世界中が揺れていた時期に、二人は共に異邦人としてアメリカを体験していたのであり、同じ空気を吸いながら自らのアイデンティティ確立に向けた研究活動に勤しんでいたのではないかと推測される。現に鶴見和子文庫には、エリクソンの主著8冊のうち6冊が所蔵され、そのうち4冊に鶴見和子氏自身の朱線や書き込みが大量に見出されるからである。彼女は同時代の研究者エリクソンとその考えを、どのように吸収したのだろうか?どのように自らの思想のうちに取り入れたのだろうか?これが本研究の発端である。

#### 2. 鶴見和子にとってのエリクソン

上述のように鶴見和子氏はエリクソンの主著8冊のうち6冊を所蔵し、4冊を綿密に読み込んだ形跡が伺える。ただし、その朱線や書き込みには当然密度の多寡があり、またどの時期に何を目的として読み込んだかは、そうした手がかりを通して推測するしかない。今回の報告では、個々のエリクソンの著作のどの部分に朱線がひかれ、またどのような書き込みが見られるかを概観し、そこから彼女の興味関心のありようを推測することにしたい。その際、特に注目した

いのはIDENTITY YOUTH AND CRISIS (1968)であり、またエリクソンの著書ではないがRoasen, P (1976)によるERIK H. ERIKSONである。前者はほぼ全巻にわたって朱線と書き込みがなされており、鶴見和子氏のエリクソン研究の底本であろうと目されるからであり、後者には表紙裏に、恐らく彼女自身の手による「Kazuko Tsurumi Princeton January 20,1977」のサインが見られるからである。この点については後述するとして、まずは各巻に見られる特徴を簡単に報告する。

①CHILDHOOD AND SOCIETY (1950/1963)

・ラインは第七章「人間の八つの発達段階」と第十一章「結論 不安を越えて」に集中している。

②INSIGHT AND RESPONSIBILITY (1964)

・ラインは第五章「心理的現実性と歴史的事実性」と第六章「黄金率の問題再考」に集中している。

③IDENTITY YOUTH AND CRISIS (1968)

・ラインは第四章、五章をのぞいて、ほぼ全巻にわたっており、書き込みも多い。鶴見和子がアイデンティティ研究の底本にした可能性が高い。

④GANDHI'S TRUTH (1969)

・ラインなし。

⑤LIFE HISTORY AND HISTORICAL MOMENT (1975) (和訳なし)

・ラインはほぼ全巻にわたっているが、特に第一章「自叙伝の観点から見た『アイデンティティ危機』」と第三章「追記と概観」、さらに第二部「ガンジー研究」に多い。

⑥TOYS AND REASONS (1977)

・ラインなし。

(エリクソンの主著の中でYOUNG MAN LUTHER (1958)、およびDIMENSIONS OF NEW IDENTITY (1974)は鶴見和子文庫に見当たらなかった。)

(補) アイデンティティに関するその他の注目書籍

⑦ROAZEN; ERIK H. ERIKSON (1976)

・表紙裏に「Kazuko Tsurumi Princeton January

20,1977」のサインあり。

・ラインは第六章「青年とアイデンティティ」、第七章「ライフサイクル」のみ。

⑧ANTHONY F.C.WALLACE; CULTURE AND PERSONALITY (1963)

O.G.BRIM,JR AND S.WHEELER; SOCIALIZATION AFTER CHILDHOOD (1966)

・ライン、書き込み多数あり。

上述の通り、この中で今回は特にIDENTITY YOUTH AND CRISIS (1968)についてももう少し詳細に見ていくことにしたい。

3. IDENTITY YOUTH AND CRISIS (1968) について

本書の構成は第1章「序章」、第2章「観察の基礎」に続いて、第3章「生活周期」でエリクソンのライフサイクル論が全般的に展開されており、第4章「生活史と事例史におけるアイデンティティの混乱」においてW.ジェームズを含む幾つかの事例が紹介され、第5章では「理論的検討」の名のもとに、アイデンティティを含む心理学諸概念の理論的検討がなされている。さらに第6章「現代の問題—青年」において学生運動への言及が見られ、第7章「女性と内的空間」、第8章「アイデンティティの拡大と民族」でまとめられている。

概念的な混乱が見られるなどの理由で、エリクソン研究者の間では必ずしも高い評価を与えられているとはいえない本書であるが、エリクソンの思想が全般にわたってコンパクトにまとめられているという意味では、本書は彼の思想を探るのに格好の文献であり、恐らくはそれが理由で先述のように鶴見和子氏も、彼の主著の中で特に力を込めて読んだことが推測される。ただし、4、5、7章についてはオミットした形跡が見られる。それぞれの理由も含めて、以下に概要を報告してみたい。

まず第1章ではフロイトの「民族的アイデンティティ」発言をアイデンティティ概念の根拠としてあげている点と、「青年期におけるイデオロギーの必要性」についての言及、「次世代の責任」や「adulthood (大人であること)」と

いった部分に朱線、書き込みがなされている。実は上述の通り、ローゼンによるエリクソンの紹介本に1977年1月、プリンストンでの鶴見氏のサインが見られることから、彼女のエリクソン研究はかなり遅い時期に集中して行われたのではないか、ということが推測される。同時代的な学生運動の根拠、自身マルクスやレーニンの著書に親しんだ経験から、まさに彼女は大人として、次世代に対してイデオロギーを提示する責任を感じていたのかもしれない。

第2章では「全体主義について」の部分に朱線、書き込みが集中し、精神分析的な記述は看過している。5章のオミットとも併せて、彼女は精神分析の理論そのものに、この時点でさほど深い興味関心は持っていなかったのかも知れない。

第3章で特徴的なのは、各発達段階についての要約的な部分に朱線が集中していることと、とりわけ「小学校教師の役割」に書き込みが見られることが挙げられる。鶴見和子氏の略歴にも小学校時代の教師、奥野庄太郎氏との邂逅が特記されているように、これは自らの思想形成に小学校時代の早期の教師の影響を強く感じていたせいかも知れない。またエリクソンの8段階については①CHILDHOOD AND SOCIETY (1950/1963) に多数の朱線と書き込みが見られることから、本書を足がかりに①への学習に移っていったことが推測される。

第4章のオミットは、他のエリクソンの主著、とりわけ上記の④GANDHI'S TRUTH (1969) や YOUNG MAN LUTHER (1958) の無視と共通する特徴である。自ら「生活綴り方運動」に飛び込んでいった鶴見氏の航跡と考え合わせると、民衆指導者としての彼らに注目したエリクソン

とは異なる視座を持っていたのであろうか。ただし、内容的には⑤LIFE HISTORY AND HISTORICAL MOMENT (1975) と重複する部分が多く、上述のように、そこでは特に第一章「自叙伝の観点から見た『アイデンティティ危機』」と第三章「追記と概観」、さらに第二部「ガンジー研究」に朱線、書き込みが多く見られることから、この点についてはさらに検討の余地が残されている。

第6章では「青年の活動」としての学生運動や、「青年とイデオロギー」にまつわる部分への注目が特徴的である。特に「青年指導者」に関するエリクソンの記述に、幾つかの朱線と書き込みが見られることから、やはり指導者としてのあり方に何らかのこだわりを感じていたことが推測される。それは第8章「女性と内的空間」の無視も併せて、ジェンダーを越えた、世代的な責任といえるようなものなのかも知れない。

今回の報告は、限られた小数の文献に見られる鶴見和子氏の痕跡を手がかりに、彼女の思想形成を推測するという、暴挙ともいえる試みなので、現時点では痕跡を跡付ける中で筆者の胸のうちに湧いてきた、こうしたさまざまな仮説を提起するに留めたい。研究会では、とりわけ彼女自身の手になる博士論文“*Social Change and the Individual: Japan before and after Defeat in World War II*”との比較検討が示唆され、その他にも数々の貴重なコメントが頂けた。今後、さらに幾つかの文献を渉猟したり、彼女自身の著作や記述を通して、さらにこういった仮説が見出され、あるいは確認された時点で、改めて論文の形で報告したい。